和歌―万葉・古今・新古今 (3)

和歌の表現技法

●枕詞

特定の語を導くために、その直前に置かれる言葉。主に五音で、直後にくる言葉が決まっている。通常は訳さない。後の語を修飾したり、リズムを整えたりする。

（例）

ひさかたの光のどけき春の日にしづ（ズ）心なく花の散るらむ（ン）　紀友則（古今和歌集・春歌下）

日の光がのどかなこの春の日に、どうして落ち着いた心もなく（桜の）花が散るのだろうか。

・おもな枕詞

しろたへの→衣・袖・雲 など　**ひさかたの**→光・日・空 など

たらちねの→ 母 など　**ちはやぶる**→神 など

●序詞

ある語句を導くために、その前で述べる言葉。歌ごとに創作され、音数や直後にくる言葉に決まりはない。枕詞より長いものが多い。省略せずに訳す。

（例）

多摩川にさらす手作りさらさらに何そこの児のここだ愛しき　東歌（万葉集）

多摩川にさらさらとさらす手織りの布のように、さらにさらに、どうしてこの娘がこんなにもいとしいのだろうか。

※「多摩川にさらす手作り」が「さらさらに」を導く。

●掛詞

一つの語に二つ以上の同音の言葉の意味を重ねたもの。

（例）

山里は冬ぞさびしさまさりける人目も草もかれぬと思へば　源宗于（古今和歌集・冬歌）

山里はとりわけ冬こそが寂しさがまさって感じられることだ。人の訪れも絶え、草も枯れてしまうと思うと。

※「かれ」は「人目も離れぬ（人の訪れもなくなってしまう）」「草も枯れぬ（草も枯れてしまう）」の二つがかかっている。

●縁語

ある言葉に関係の深い語を用いて、歌のおもしろみを高める。

（例）

玉の緒よ（オ）絶えなば絶えねながらへ（エ）ば忍ぶることの弱りもぞする　式子内親王（新古今和歌集・恋歌一）

（私の）命よ。絶えてしまうものなら絶えてしまえ。生きながらえていると、秘める力が弱まって（恋心を人に知られて）しまうかもしれないから。

※「絶え」「ながらへ」「弱り」は「緒」の縁語。

確認テスト

(1) 例に従って、次の和歌に含(ふく)まれる枕詞に〰線を引きなさい。

（例）<u>ひさかたの</u>光のどけき春の日にしづ心なく花の散るらむ

ちはやぶる神世(かみよ)も聞かず竜田(たつた)河から紅(くれなゐ)に水くくるとは　在原業平(ありわらのなりひら)（古今和歌集・秋歌下）

（不思議なことがあったという）神代の昔でも聞いたことがない。竜田川が（流れる紅葉で）から紅色に水をくくり染めにするとは。

(2) 次の二首に共通して含(ふく)まれる枕詞を探し、書きぬきなさい。

あしひきの山のしづくに妹(いも)待つと吾(あれ)立ち濡(ぬ)れぬ山のしづくに　大津皇子(おおつのみこ)（万葉集）

山の木々から落ちるしずくに、あなたを待っていた私はすっかり立ち濡れてしまった。その山のしずくに。

吾(あ)を待つと君が濡れけむあしひきの山のしづくに成らましものを　石川郎女(いしかわのいらつめ)（万葉集）

私を待つといってあなたが濡れたというその山のしずくに、なれるものならなりたかったのに。

［　　　　　］

(3) 次の歌の〰線部は、「あかでも」を導いている。このような言葉を何というか答えなさい。

<u>結ぶ手の滴(しづく)ににごる山の井の</u>あかでも人に別れぬるかな　紀貫之(つらゆき)（古今和歌集・離別歌）

両手を合わせてすくい上げた手からしたたる滴で濁り、十分に飲むことができない山の井のように、満足できないまま、あなたと別れてしまうことだなあ。

［　　　　　］

(4) 次の歌の――線部は、ある言葉との掛詞になっている。訳を参考に、解答欄(かいとうらん)に当てはまる言葉を答えなさい。

世の中は何か常なるあすか川昨日の淵(ふち)ぞ今日(けふ)は瀬(せ)になる　よみ人知らず（古今和歌集・雑歌下）

世の中はいったい何が永遠であろうか（いや永遠のものなどない）。明日の名を持つ飛鳥川も、昨日は淵であったところが、今日は瀬となっている。

飛鳥川と［　　］の掛詞

(5) 次の歌には、「衣」に関係の深い「き」「なれ」「つま」「はる」が用いられている。このような言葉を何というか答えなさい。

唐衣(からころも)きつつなれにしつましあればはるばるきぬる旅をしぞ思ふ　在原業平（古今和歌集・羇旅(きりょ)歌）

唐衣を着つづけてなじむように、慣れ親しんだ妻が（都に）いるので、はるばるやってきたこの旅のさびしさを思う。

［　　　　　］